

日本をふくむ東アジアの伝統音楽の世界では古来、さまざまな種類の、書かれた楽譜が伝えられている。日本においても、笛、琵琶、笙、琴などの楽器を中心に、平安時代にさかのぼる貴重な古楽譜が残されている。当時の演奏がどのようなものであったかを知るためには、文学や日記などの文字資料を参照するだけでなく、楽譜に見られる記号同士の論理的整合性、楽器や声を持っている物理的特性などを考慮し、推論することが必要不可欠である。多面的な取り組みが必要である。

本プロジェクトは、日本伝統音楽研究センターに所蔵されている資料および楽器を使って、古い楽譜の解釈を行ない、演奏を行なうことをめざしているが、本年度は、仏教音楽の声明や能楽の謡の記譜法にかんする公開研究会(2016年2月17日開催)や展覧(2016年2月より)の開催を目標として、記譜のもっている創造力にかかわる研究を展開した。

記譜は、失われる音を元通りに復元する、あるいは思い出すことを第一の目的として発生したものである。しかしながら、ことはまっすぐには進まない。逆説的ではあるが、後の者が、書かれた内容に忠実であろうとすればするほど、書かれていない膨大な領域が意識されもし、予想をこえる大きな変化もおこりうる。記譜は、オリジナルから逸脱する方向をふくみ込んでいる。

記譜をもとにした逸脱、あるいは創造という側面へと焦点をあてるべく、公開研究会(2016年2月17日開催)では、同じテキスト、あるいは、同じ図形的な楽譜が、様々な宗派によって、様々なうたわれる様子の比較を試みた。たとえば、仏教の声明のある曲「唄」は、いくつかの宗派でうたわれるが、「妙(めう)」という一語が、長く引き延ばされてうたわれる点にかわりはない。またその引き延ばしをあらわす図形的な輪郭も複数の宗派で共通している。その「妙」の文字の左に、長く引き延ばされている線(写真参照)を、地形図にたとえると次のようになる。最初は、谷におち、そこから小高い台地にのぼる。しばらく平にすすむと、また谷におちる。今度は、急斜面をあがって高い山の頂上に向かう。頂上で一休みしたあと、次は頂上からくだって終わる。

「高い山」にあがる図形を、ある流派は、2度あがる音の繰返し(たとえば、ドレ、ドレ、ドレ、のような繰返し)によって表現する。反対に急斜面の下降は、レド、レド、レドのように、2度さがる音型の繰返しで表現する(曹洞宗の場合)。他の宗派は高い山に上ることを、基本音を7度上昇させることによって表現する(天台宗の場合)。

それぞれの宗派には、新しい解釈を生み出している意識はまったくない。しかし、比較作業から見出すことができるのは、それぞれの宗派が、長い時間をかけて生み出した独自性である。

伝統音楽は、自らの保存の正確を期すべく、記譜法を開発し、それを守ってきた。しかし長期的には、個人では思いつくことすらできない、新しい創造をおこなってきている。伝承を通じた創造のあり方に光をあてるのが、このプロジェクトの目的のひとつである。

藤田 隆則(日本伝統音楽研究センター教授)